

# 2020年度(2020年4月~2021年3月)の動き

## Topics

### Topics 1

## 腸管不全治療センターの開設

2020年4月1日付けで腸管不全治療センターを設置しました。腸管不全とは、腸から栄養や水分を吸収する機能が、先天的あるいは後天的に障害された状態のことで、静脈からの定期的な栄養・水分補給を要します。最も多い原因は短腸症と腸管運動障害で、先天的なものや後天的なものがあります。難病支援疾患のひとつであり、欧米では、基幹病院に腸管不全治療チームが設置され、患者を集約し専門的な診療(腸管リハビリテーション)を実践しています。しかし、日本にお

ける腸管不全患者の診療は個々の医師や単一診療科が中心となっており、在宅医療から小腸移植を含めた多職種連携医療を実践し広く患者を受け入れる部門を有する病院は存在しませんでした。この現状を踏まえ、本院では、日本における腸管不全治療の拠点として腸管不全治療センターを設置し、より包括的・専門的・長期的な多職種チーム医療体制を整備しました。現在年間50名以上の腸管不全患者に対して、個々の病状にあったオーダーメイド治療を多職種で積極的に支援しています。さらに2020年度にはコロナ下にも関わらず約20名の新規コンサルトを受け入れ、診断・治療にあたりました。



### Topics 2

## 臨床凍結保存センターの開設

臨床凍結保存センターは①再生医療のために患者に投与したiPS細胞その他を万一の副作用が出た時のために長期間保存する、②患者に投与するために調整した細胞を保管管理する、③生殖補助医療やがんなどの疾患で将来性線機能低下が予想される患者から、凍結受精卵、卵子、精子、卵巣組織を預かり将来妊娠が可能になるまで長期間保存する(がん生殖医療など)、という3つの目的のため2020年9月1日に発足しました。研究的な要素を含む先端医療に関してはこれまで、その担当診療科が資料の保存管理に責任を持っていました。ここで言う長期保存とはカルテ保存義務期間(5年)を超えた10~20年の期間を指し、これまでの医療界の常識を超えています。この要望に応えるためには担当診療科や、医学系研究科の講座を超越した病院全体の安定的な体制が必要で本センターの発足となりました。

2025年に予定される統合診療棟の開設後には同棟にバイオバンク室が設置され、凍結された細胞をバイオバンクで一元管理する予定です。それまでは医学系研究科・未来医療開発部や生殖医療センターに間借りをする形で活動します。



●専従の技術職員が管理する液体窒素タンク



[エントランスホール]



[オープンテラス]



[病棟・診療棟外観]



[がん相談支援室]



[正面玄関]

## Osaka University Hospital through Photographs 写真で見る大阪大学医学部附属病院



[特定集中治療室(高機能ICU)]



[血液浄化部]



[ドクターヘリ]



[小児医療センター]



[ホスピタルパーク]



[高精細画像CT]



[入退院センター]



[手術支援ロボット ダヴィンチ]



[高度救命救急センター 血管造影室]



[オンコロジーセンター棟抗がん剤調製室]



[治験コーナー・臨床研究相談窓口]